様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ９ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０１６９４

研究課題名（和文）スポーツ史の分野横断的/国際的記述―アメリカ合衆国の社会/文化と身体/身体運動

研究課題名（英文）Writing a Interdisciplinary and Transnational Sport History: Society and Physical Culture/Movement in the United States

研究代表者
川島　浩平（Kawashima, Kohei）

早稲田大学・スポーツ科学学術院・教授

研究者番号：６０２４５４４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：第一に、これまで日米両国で出版されてきた概説書5点（和書2点と洋書3点）の構成と内容を対象に、比較的な視点から詳細に分析し、内容と構成上の特徴・特長を割り出し、そのうえで書籍間の比較と対照、さらに和書と洋書間の比較と対照をおこない、求められる邦語概説書の課題と方向性を析出した。第二に、アメリカスポーツ史概説書を出版し得ずにいる、日本の学界の相対的非生産性の背景を探るために、『スポー史研究』に掲載された論文の著者と主題を対象とする通時的分析をおこなった。第三に、概説書先行文献の比較的考察、および概説書記述を支える研究活動の振り返りから析出された結果への対応として７つの分野での研究成果をまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
邦語によるアメリカスポーツ史概説書に求められるのは、デイビーズ著『アメリカスポーツ史』の邦語版のような書籍、すなわち事典的な網羅性と学術書としての深みを兼ね備え、さらにいうなら、先行研究二著出版以来40年近くにおよぶ空白をアップデートできる新しさであること明らかにし、このような概説書の出版にむけて、①学際的方法論の検討、②日米二国間、日米中三国間の研究活動連携の提案、③求められる概説書の基盤構築作業、④人種・エスニックマイノリティの視点からの振り返り、⑤近代オリンピック運動の視点からの振り返り、⑥その他の可能性の検討、⑦アメリカスポーツの日本伝播に関する研究、という7つの分野で成果をまとめた。

研究成果の概要（英文）：First, the composition and contents of five survey books (two Japanese and three foreign) published in Japan and the USA were analyzed in detail from a comparative perspective to determine the characteristics and features required for future publication. Second, a diachronic analysis of the authors and subjects of the articles published in the Journal of Sport History was conducted to investigate the background of the relative unproductivity of the Japanese academic community in publishing overviews of American sport history. Third, based on the comparative discussion of the five overview books and the review of the research activities underpinning the overviews' writing, research has been done in seven related areas that satisfy the demand derived from these overviews.

研究分野：スポーツ史・スポーツ人類学

キーワード：スポーツ史　スポーツ人類学　北米スポーツ史学会　スポーツ史学会　スポーツの伝播

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

いまやアメリカスポーツ（野球、アメリカンフットボール、バスケットボール等、アメリカ出自のスポーツ）は、競技場で、そしてお茶の間で人気を博している。しかしそうした一般受けとは裏腹に、その歴史に関する出版は長く低迷してきた。一般の人々の、アメリカスポーツ史に対する関心は低く、その理解は断片的なままである。過去の研究・著述動向は、アメリカスポーツ史概説が久しく出版されてこなかったことを明らかにする。山中良正著『アメリカスポーツ史新体育学講座第 3 巻』（逍遥書院、1960 年)と小田切毅一著『アメリカスポーツの文化史』（不昧堂出版、1982 年）は、この分野の先駆的研究である。しかしいずれも、40 年以上も昔の出版物である。現在待たれているのは、プロとアマ両界の最新事情を取り入れ、アメリカと日本両国の研究者による最近の研究成果を取り入れて内容を更新した、邦語によるアメリカスポーツ史概説書なのである。

他方アメリカは、優れたアメリカスポーツ史概説書を次々と出版してきた。ジェラルド・R・ジェム（Gerald R. Gems）他著『アメリカ史におけるスポーツ(*Sports in American History: From Colonization to Globalization*)』（Human Kinetics, 2008)、エリオット・J・ゴーン／ウォレン・ゴールドシュタイン（Elliot J. Gorn/Warren Goldstein）著『アメリカスポーツ史概説(*A Brief History of American Sports*)』(Second Edition, University of Illinois Press, 2013) 、そしてリチャード・O・デイビーズ（Richard O. Davies）著『アメリカスポーツ史(*Sports in American Life: A History*)』 (Third Edition, Wiley-Blackwell, 2016)は、その代表例である。各書は、ヨーロッパ人入植以前の時代に遡ってアメリカ先住民の経験や文化を掘り起こし、各時代の宗教的論争、人種的な偏見や差別と国家の統合、階級対立、女性の進出とセクシュアリティ、改革運動、高等教育、マスメディア、薬物、消費文化などについて、社会史・文化史研究の中心課題を踏まえながら詳細に記述し、グローバル化されるスポーツの行方を展望する。これら三者は、アメリカスポーツの歴史を社会・文化的文脈に位置づけて捉える視点を確立している。

２．研究の目的

アメリカの動向は、文化的、社会的な経験としてスポーツを振り返る視点と、グローバルかつトランスナショナルな事象としてスポーツ史を展望する視点が、邦語による出版物に、いまとくに必要とされていることを示唆する。本研究はこれを受けて、文化史、社会史研究の成果を取り入れ、対象とする時代枠を拡大し、さらにアメリカスポーツの日本への伝播と受容を射程に入れた通史記述の可能性を検討することを目的とする。具体的な競技として焦点を置くのは、野球、バスケットボール、そしてアメリカンフットボール（以下アメフト）の三者である。これらは、観客動員数、試合視聴率、競技人口の多さ、そしてアンケート結果などからアメリカ「三大スポーツ」と呼ばれる。野球は日本での研究成果がもっとも多く、バスケットボールは最近とみに研究者の注目を集めている。アメフトは、アメリカスポーツの典型とみなされることが多いが、その研究成果はもっとも少ない。

３．研究の方法

（１）アメリカスポーツ史概説書の比較的考察

①各書の特徴・特長の析出

上述した邦語によるアメリカスポーツ史概説書 2 点（山中、小田切）と、英語によるアメリカスポーツ史概説書 3 点（ジェムズ、ゴーン/ゴールドシュタイン、デイビーズ）の構成と内容を対象に、比較的な視点から詳細に分析する。まず各書を精読し、それぞれの各章、各部、各節の特徴を判定するために、各パラグラフ（段落）の内容を反映しうる、あるいは包括しうる語または句を抽出し一覧表化する。つぎに各パラグラフ内容を反映する語または句から、各節の内容を次の 8 つのカテゴリに分類する。すなわち１．自時代背景あるいは時代文脈の考察・記述・解説、２．階級的視点からの、あるいは階級との関連での考察・記述・解説、３．人種・エスニシティ的視点からの、あるいは人種・エスニシティとの関連での考察・記述・解説、４．ジェンダー的視点からの、あるいはジェンダーとの関連での考察・記述・解説、５．アメリカ三大スポーツ（野球、アメフト、バスケットボール）の視点からの、あるいはそれらとの関連での考察・記述・解説、６．それ以外の個別競技種目の視点からの、あるいはそれらとの関連での考察・記述・解説、７．近代オリンピック運動の視点からの、あるいは同運動との関連での考察・記述・解説、８．他諸テーマ（地域性、宗教、メディア、教育、コミュニティ、プロ化、ギャンブル、スキャンダル等）の視点からの、あるいはそれらとの関連での考察・記述・解説の 8 つのカテゴリである。さらに一覧表の各書各節を、１は赤、２黄、３は青、４は紫、５は空色、６は緑、７は黄緑、８は橙で色分けし、各書の構成と内容の共通点と相違点を視覚的に浮かび上がらせ、その特徴・特長を把握する。

②求められる概説書の課題・方向性の析出

①の方法により各書の内容と構成上の特徴および特長を割り出し、そのうえで書籍間の比較と対照をおこなう。さらに邦語文献 2 冊と、英語文献 3 冊間の比較と対照をおこなう。以上より、求められる邦語概説書の課題と方向性を析出する。

（２）概説書記述を支える研究活動の振り返り

①焦点の設定と分析方法

小田切著（1982 年）の出版以来、長きにわたってアメリカスポーツ史概説書を出版し得ずにいる、わが国学界の相対的非生産性の背景を探るために、スポーツ史学会の機関誌『スポー史研究』に掲載された論文の著者と主題を対象とする通時的分析をおこなう。ペンシルヴァニア州立大学でスポーツ史を専攻として教鞭をとるマーク・ダイヤソンのアカデミック・アイデンティティ分類を援用し、論文著者をアカデミック・アイデンティティで分類する。さらに論文の主題を、対象とする地域（国民国家等）で分類する。ダイヤソンは、スポーツ学・スポーツ研究の立場から歴史を記述・分析する研究を「スポーツヒストリー（Sport History)」、これに携わる研究者を「スポーツヒストリアン（Sport Historian)」と定義し、他方で歴史学・歴史研究の立場からスポーツを記述・分析する研究を「ヒストリー・オブ・スポーツ（History of Sport)、これに携わる研究者を「ヒストリアン・オブ・スポーツ（Historian of Sport)」と定義する。こうして、スポーツ史研究者を、その研究の方法と目的、そしてアイデンティティのありかたによって二分類する方法を確立した。本研究はダイレソンによるこの二分類法を援用するのである。

②課題・方向性の析出

『スポーツ史研究』掲載論文の対象地域(国民国家等)と著者のアイデンティティの分析から、アメリカスポーツ史概説書が書かれてこなかった研究環境の課題と、今後、事態を改善するために求められる方向性を析出する。

（３）（１）と（２）から析出された結果への対応としての研究活動

アメリカスポーツ史概説書先行文献の比較的考察、および概説書記述を支える研究活動の振り返りから析出された結果への対応として次の７つの分野での研究をおこなった。すなわち①学際的方向性の可能性、②日本とアメリカ二国間あるいは日本とアメリカと中国三国間の研究活動連携の可能性、③求められる概説書の基盤構築作業、④人種・エスニックマイノリティの視点からの振り返り、⑤近代オリンピック運動の視点からの振り返り、⑥その他の可能性、⑦アメリカスポーツの日本伝播に関する研究の７つである。

４．研究成果

（１）アメリカスポーツ史概説書先行文献の比較的考察

分析の結果、各書は次のような特徴があることが明らかとなった。

山中著は 17 の章からなり、対象とする時代は、1492 年の「新大陸発見」から第二次世界大戦後の 1950 年代までである。記述内容は 8 カテゴリのうちの時代背景・時代文脈（赤)、三大スポーツ（空色)、およびそれ以外の競技種目（緑）が多くを占める。時代や流れの特徴を説明しながら、それぞれの時代枠での競技種目の動向を論じるという、いうなれば「事典的」な記述を特徴とする。

小田切著は序章、本論を構成する 5 つの章、そして結章の 7 つの章からなり、対象とする時代はイギリスの北米植民地建設が始まる 17 世紀初頭から 1920 年代までである。記述内容は 8 カテゴリのうちの階級的視点（黄）および他諸テーマの視点（橙）が多くを占める。1980 年代までに日米学界で興隆した社会史や文化史の研究成果を踏まえて、アメリカ史におけるスポーツ現象を多角的な視点から考察する、学術書としての色彩のつよい書籍であるといえる。

ジェムズ著は、本論を構成する 9 つの章と終章の 10 の章からなり、対象とする時代はイギリスの北米植民地建設以前の時代から 21 世紀の現在までである。アメリカ建国以降は 20 年から 30 年で時代を区分し、それぞれの区分を各章で取り上げる構成になっている。テーマよりも時系列で整理することを優先しているといえる。記述内容は 8 カテゴリをほぼまんべんなく取り上げている。その点でバランスの取れた書籍であるといえる。各時代、各事象を学術的に掘り下げるよりも、より多くの事項についての情報をより多く提供する方針をとっている。

ゴーン／ゴールドシュタイン著は、本論を構成する７つの章、そして終章の 8 つの章からなり、対象とする時代はイギリスの北米植民地建設が始まる 17 世紀初頭から 21 世紀の現在までである。記述内容は諸テーマの視点（橙）が多くを占める。2 人の共著者が、前半と後半を担当し、それぞれが専門分野とする視点から、その分野の学術的な研究成果に基づき、スポーツ事象を時代の文脈に位置づけ、深い考察を展開している。本書も学術書としての色彩が強い著作であるといえよう。

デイビーズ著は、本論を構成する 17 つの章とエピローグの 18 の章からなり、対象とする時代はイギリスの北米植民地建設が始まる 17 世紀初頭から 21 世紀の現在までである。記述内容は８カテゴリをほぼまんべんなくとりあげているが、同じ色で塗られる章が多いことが特徴的である。つまり、通時性よりもテーマを優先した構成になっているといえる。この構成により、よみやすさと、学術書としての深みを各章に与えていることが本書の特長である。

邦語文献二著に共通するのは、出版年に直近するもっとも近い過去についての記述を避けているかにみられる姿勢である。1960 年出版の山中著は終戦直後まで、1982 年出版の小田切著は 1920 年代までで記述を終える。出版年直前の過去に関する情報を可能な限り取り込もうとする英語文献三著と顕著な対照をなしている。また山中とジェムズ、小田切とゴーン／ゴールドシュタインは、構成と内容の点で類似しているといえる。前者はより事典的、後者はより学術的であ

るといえる。デイビーズは、前者の事典的な詳細さと、ゴーン／ゴールドシュタインの学術書としての強みを兼ね備えているといえる。そう考えるなら、邦語によるアメリカスポーツ史概説書に求められるのは、デイビーズ著の邦語版のような書籍であるといえるだろう。そこに求められるのは、事典的な網羅性と学術書としての深みを兼ね備え、さらにいうなら、先行研究二著出版以来 40 年近くにおよぶ空白をアップデートできる新しさ、ということになる。

（２）概説書記述を支える研究活動の振り返り

上述の方法により、1988 年から 2020 年までにスポーツ史学会機関誌『スポーツ史研究』に掲載された 202 編の文献を、研究対象とする地域別に分類し、日本 79 編、イギリス 36 編、グローバル／国際 27 編、ドイツ 23 編、アメリカ 12 編、ギリシア 10 編、中国 6 編、韓国 4 編、アイルランド、エチオピア、インド、オーストラリア、カナダ、スペイン各 1 編との結果を得た。近年におけるアメリカスポーツ史概説書出版の不在は、ここに反映された、研究活動生産力の相対的に低い位置づけと関連しているといえる。他方、文献執筆者のアイデンティティをダイヤソンの方法論によって「ヒストリアン・オブ・スポーツ」と「スポーツヒストリアン」に分類し、その経年変化を示したものが次表である。

Table 1: # of Two Groups by Decade (Japan)								
	1988-92	1993-97	1998-2002	2003-07	2008-12	2013-17	2018-	Total
Historians of sports	17	21	21	26	23	18	11	137
sports historians	12	7	11	14	7	11	3	65

二つの集団はスポーツ史学会創設以来現在までいつの時代も共存し、一定以上の学術的生産力を保持してきたことがわかる。下掲の論文で指摘したとおり、二つの集団はアメリカ、中国の学会・学界でも共存し、それぞれが特有のダイナミズムを作り出してきたことがわかっている。二国間、三国間での研究活動の連携は、日本におけるアメリカスポーツ史研究に刺激を与える契機となることが期待できる。

（３）析出された結果への対応としての研究活動

①学際的方法論の可能性

英語によるアメリカスポーツ史概説書から明らかなように、概説書が依拠する文献は歴史学を越えて学際性を強く帯びるに至っている。通史記述の基盤構築の一環として、学際的交流活動を企画した。とくに重要であるのは、文化人類学・スポーツ人類学との連携である。以下はその成果である。

・川島浩平、窪田暁、松岡秀明（以上パネリスト）、ニコ・ベズニエ（基調講演）、シンポジウム「スポーツ人類学 30 年 - *The Anthropology of Sport* (2018)をめぐって - 」日本スポーツ人類学会第 20 回大会　2019 年 3 月 21 日。

・川島浩平、石井昌幸、窪田暁、松岡秀明と共訳　ニコ・ベズニエ／スーザン・ブロウネル・トーマス・F・カーター著『スポーツ人類学　グローバリゼーションと身体』共和国、2020 年。

・川島浩平、石井隆徳他 10 名「合評会『スポーツ人類学　グローバリゼーションと身体』」『日本体育大学紀要』50.5017　2021 年。

・川島浩平、「「スポーツ文化（史学・人類学）研究における理論と実践」―方法論とアカデミック・アイデンティティのマトリックスから―」日本アメリカ史学会第 18 回年次大会シンポジウム A 「アメリカ史研究と隣接諸社会科学の対話」2021 年 9 月 11 日。

②日米二国間、日米中三国間の研究活動連携の可能性

アメリカスポーツ史概説書出版の基盤構築となる研究活動の状況を、日本のスポーツ史学会機関誌『スポーツ史研究』での執筆・執筆者関連のデータの精査を通して考察した。アメリカスポーツ史研究の相対的生産力不足を明らかにし、活性化のために「スポーツヒストリアン」と「ヒストリアン・オブ・スポーツ」の関係性をテーマとして、アメリカ、中国の関係者と対話することの意義を主張した。

・KAWASHIMA, Kohei, Zeng Zuo, “US-Based Historical Studies of Sports and the Academe of Japan and China,” *Journal of Sport History* 48.3 (Fall 2021),pp.329-344.

③求められる概説書の基盤構築作業

アメリカスポーツ史概説書のプロトタイプを模索する努力の一環として、階級、人種・エスニシティ、ジェンダーという 3 つの属性の観点から分けて記述する試みを以下の一般書でおこなった。

・川島浩平「第 9 章アメリカ　レベル・プレイングフィールドを目指す限りなき挑戦」坂上康博他編『スポーツの世界史』一色出版、2018 年。

　また、アメリカスポーツの日本への伝播に関する調査の出発点となる考察を、以下の論文でおこなった
・KAWASHIMA, Kohei, “Introducing American Sports to Japan: Baseball, Basketball, and Football in the Meiji, Taisho, and Showa Eras (1868-1934),” *The Journal of Human and Cultural Sciences* 49.2 (2017), pp.113-130.
　④人種・エスニックマイノリティの視点からの振り返り
　アメリカスポーツ史の盲点ともいわれるハーレム・ルネサンス期のスポーツに関して、この時代をスポーツ史研究とスポーツ人類学研究という二つの学術的潮流が生じる起源として位置づけるという視点からの考察をおこなった。
・川島浩平「六　ハーレム・ルネサンスにおけるスポーツ言説―「黒人アスリートの時代」へのプレリュードとして」松本昇監修　深瀬有希子・常山菜穂子・中垣恒太郎編著『ハーレム・ルネサンス＜ニュー・ニグロ＞の文化社会批評』明石書店 2021 年,pp.124-148.
　⑤近代オリンピック運動の視点からの振り返り
　アメリカスポーツ史を、近代オリンピック運動と階級、人種・エスニシティ、ジェンダーの関わりを視点として振り返った。
・川島浩平「第 8 章　アメリカのオリンピック・センチュリーと社会正義の実現」清原聖子編『教養としてのアメリカ研究』大学教育出版 2021 年、pp.144-167
　ロサンゼルス五輪大会をめぐる日米間の摩擦の背景の動きとして、日本においてスポーツ医学が誕生する経緯を検証した。
・KAWASHIMA, Kohei, with Rikuma Sasaki as the first author, “The Birth of Sports Medicine in Prewar Japan: A Perspective on Its Ideological and Organizational Origins,” *The International Journal of the History of Sport* 38.8 (2021), pp.913-933.
　⑥その他の可能性
　英語版アメリカスポーツ史概説書で共通して重視されているが、日本語版ではあまり顧みられることのない「余暇」というパースペクティブから、20 世紀のスポーツ史を再検討した。
・川島浩平「アメリカ史の中の『余暇』」日本アメリカ史学会年次大会シンポジウム C　2017 年。
　アメリカの歴史・文化を「身体」という視点から振り返った
・川島浩平「部会Ｃ身体の境界とアメリカ文化　討論」アメリカ学会第 53 回年次大会 2019 年。
　⑦アメリカスポーツの日本伝播に関する研究
　以下の文献および口頭発表を通じて、アメリカスポーツの日本伝播の原因と経緯について考察した。
・KAWASHIMA, Kohei, “‘We Will Try Again, Again, Again to Make It Bigger’: Japan, American Football, and the Super Bowl in the Past, Present, and Future,” *The International Journal of the History of Sport* 34.1-2 (2017), pp.121-138.
・KAWASHIMA, Kohei, “Japan,” Gerald Gems & Gertrude Pfister, eds, *Touchdown: An American Obsession* (Berkshire, 2019).
・KAWASHIMA, Kohei, “Introducing American Sports to Japan: Baseball, Basketball, and Football in the Meiji, Taisho, and Showa Eras (1868-1934),” North American Society for Sport History, 2017.
・KAWASHIMA, Kohei, “Football Came to Japan: Complexity and Multiplicity in an Asian Country’s Acceptance of America’s No.1 College Sport,” North American Society for Sport History, 2018.
・KAWASHIMA, Kohei, “Basketball Came to the Land of the Rising Sun: The YMCA, Athletes and Agency in the Diffusion of Basketball in Modern Japan, 1880s to 1930,” North American Society for Sport History, 2019.
・KAWASHIMA, Kohei, “From the YMCA to Universities: The Transition of Hegemony and Authority in the Management of Basketball in Japan during the 1920s,” Society for East Asian Anthropology Regional Conference, 2019.
・川島浩平「近代日本におけるアメリカンスポーツの普及とジェンダリング (gendering) ―1890 年代から 1910 年代のバスケットボールを中心に―」日本スポーツ人類学会　2021 年 3 月。
・KAWASHIMA, Kohei, “Beyond the National Framework: New Perspectives on the Study of Prewar Japanese Sports History,” North American Society for Sport History, 2021.
・川島浩平「日本におけるスポーツ、文化、ジェンダリング」研究代表者牛村圭　共同研究会「文明としてのスポーツ／文化としてのスポーツ」国際日本文化研究センター　2021 年 11 月 [https://www.nichibun.ac.jp/online/open_day/]
・川島浩平「近代日本におけるスポーツ、文化、ジェンダリング―バスケットボールを事例に―」日本スポーツ人類学会　2022 年 3 月。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 川島浩平	４．巻 13
２．論文標題 ハーレム・ルネサンスにおけるスポーツ言説―「黒人アスリートの時代」へのプレリュードとして―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 多民族研究	６．最初と最後の頁 3-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川島浩平	４．巻 49.2
２．論文標題 Introducing American Sports to Japan: Baseball, Basketball, and Football in the Meiji, Taisho, and Showa Eras (1868-1934)	５．発行年 2017年
３．雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌	６．最初と最後の頁 113-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川島浩平、石井隆徳他10名	４．巻 50
２．論文標題 合評会『スポーツ人類学　グローバリゼーションと身体』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本体育大学紀要	６．最初と最後の頁 5017-5017
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 KAWASHIMA, Kohei, Zeng Zuo	４．巻 48.3
２．論文標題 US-Based Historical Studies of Sports and the Academe of Japan and China	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of Sport History	６．最初と最後の頁 329-344
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Sasaki Rikuma、Kawashima Kohei	4．巻 38
2．論文標題 The Birth of Sports Medicine in Prewar Japan: A Perspective on Its Ideological and Organizational Origins	5．発行年 2021年
3．雑誌名 The International Journal of the History of Sport	6．最初と最後の頁 913～933
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/09523367.2021.1969919	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Kawashima Kohei	4．巻 34
2．論文標題 ‘We Will Try Again, Again, Again to Make It Bigger’: Japan, American Football, and the Super Bowl in the Past, Present, and Future	5．発行年 2017年
3．雑誌名 The International Journal of the History of Sport	6．最初と最後の頁 121～138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/09523367.2017.1336161	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　6件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 川島浩平
2．発表標題 近代日本におけるアメリカンスポーツの普及とジェンダリング ―1890年代から1910年代の バスケットボールを中心に―
3．学会等名 日本スポーツ人類学会
4．発表年 2020年～2021年

1．発表者名 Kohei Kawashima
2．発表標題 Beyond the National Framework: New Perspectives on the Study of Prewar Japanese Sports History
3．学会等名 North American Society for Sport History Annual Conference（国際学会）
4．発表年 2020年～2021年

１．発表者名 Kohei Kawashima
２．発表標題 Basketball Came to the Land of the Rising Sun: The YMCA, Athletes and Agency in the Diffusion of Basketball in Modern Japan, 1880s to 1930
３．学会等名 North American Society for Sport History（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川島浩平
２．発表標題 ハーレム・ルネサンス（HR）におけるスポーツ言説の変容 ―「黒人アスリートの時代」へのプレリュードとして―
３．学会等名 多民族研究学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kohei Kawashima
２．発表標題 From the YMCA to Universities: Transition of Power and Authority in the Management of Basketball in Japan during the 1920s
３．学会等名 Society for East Asian Anthropology Regional Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kohei Kawashima
２．発表標題 The Masculinization of Basketball in Japan, 1891-1930
３．学会等名 Macalester College Guest Lecture（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kohei Kawashima
２．発表標題 Football Came to Japan: Complexity and Multiplicity in an Asian Country’s Acceptance of America’s No.1 College Sport, 1902-1946
３．学会等名 North American Society for Sport History 2018 Convention（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川島浩平
２．発表標題 A Maker or a Breaker of Human Hierarchies?Sport and Difference in Social Identities 強化か緩和か？―属性による差異とスポーツの関係性をめぐって―
３．学会等名 日本スポーツ人類学会第20回大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川島浩平
２．発表標題 部会C 身体の境界とアメリカ文化　討論
３．学会等名 アメリカ学会第53回年次大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川島浩平
２．発表標題 ハーレム・ルネサンスの地平―The Arts of Modern Black Bodies
３．学会等名 多民族研究学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川島浩平、窪田暁、松岡秀明
２．発表標題 シンポジウム「スポーツ人類学30年―The Anthropology of Sport （2018）をめぐって
３．学会等名 日本スポーツ人類学会第20回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 川島浩平
２．発表標題 スポーツ文化（史学・人類学）研究における理論と実践―方法論とアカデミック・アイデンティティのマトリックスからー
３．学会等名 日本アメリカ史学会第18回年次大会シンポジウムA
４．発表年 2021年

１．発表者名 川島浩平
２．発表標題 アメリカ史の中の「余暇」
３．学会等名 日本アメリカ史学会年次大会シンポジウムC
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kohei Kawashima
２．発表標題 Introducing American Sports to Japan: Baseball, Basketball, and Football in Meiji, Taisho, Showa Eras 1868-1934
３．学会等名 North American Society for Sport History（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 川島浩平
２．発表標題 日本におけるスポーツ、文化、ジェンダリング
３．学会等名 国際日本文化研究センター　共同研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 川島浩平
２．発表標題 近代日本におけるスポーツ、文化、ジェンダリングーバスケットボールを事例に
３．学会等名 日本スポーツ人類学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計7件

１．著者名 ニコ・ベズニエ、スーザン・ブロウネル、トーマス・F・カーター著、川島浩平・石井昌幸・窪田暁・松岡秀明訳	４．発行年 2020年
２．出版社 共和国	５．総ページ数 473
３．書名 スポーツ人類学　グローバリゼーションと身体	

１．著者名 松本　昇、深瀬　有希子、常山　菜穂子、中垣　恒太郎	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 612
３．書名 ハーレム・ルネサンス	

１．著者名 明石　紀雄、大類　久恵、落合　明子、赤尾　千波	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 352
３．書名 現代アメリカ社会を知るための63章【2020年代】	

１．著者名 Gerald R. Gems	４．発行年 2019年
２．出版社 Berkshire	５．総ページ数 364
３．書名 Touchdown: An American Obsession	

１．著者名 坂上康博他	４．発行年 2018年
２．出版社 一色出版	５．総ページ数 652
３．書名 スポーツの世界史	

１．著者名 清原　聖子	４．発行年 2021年
２．出版社 大学教育出版	５．総ページ数 236
３．書名 教養としてのアメリカ研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

早稲田大学スポーツ科学学術院スポーツ文化研究室 https://racism-sport.com/ 早稲田大学研究者データベース http://researchers.waseda.jp/profile/ja.5c187cb14932dacbbcd5aeb6bfca02d9.html WASEDA University Researcher Database http://researchers.waseda.jp/profile/en.5c187cb14932dacbbcd5aeb6bfca02d9.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関